

日本列島の古代貝文化試論

1 はじめに

玉や琥珀、真珠、鼈甲、象牙などは、古来、時に距離をいとわず求められ加工されて、民族固有の美意識や伝承を表現する重要な手段となってきた。独自の表現力をもつ貝殻もまた然りである。日本列島においても、少なからぬ文物が南北にわたるとりどりの貝殻によって表現されてきた。

ここでは、貝殻の関与する文化現象の総体を「貝文化」とよぶことにしたい。以下、主として私のこれまでかかわってきた貝製品をとりあげ、これらがどのようにして日本文化の枠組みに取り込まれていったかを整理してみたい。これによって貝文化を構造的に分類するモデルを示し、今後の貝文化研究のステップにしたいと思うからである。

木 下 尚 子

2 素材としての貝——貝殻の文化的属性分析

人が貝殻を素材に選ぶのは、特定の貝殻のある属性を積極的に評価・選択した結果である。本論にはいる前に、貝殻に備わる基本的属性を整理しておこう。貝殻の文化的属性を、私は質、形、外見、加工、造形（構造性）、生態の六レベルにおいて以下のように考えた（…以下は具体的な属性の内容）。

- a 質…硬く組織的。
- b 形…一定している。
- c 外見の美観…固有の色、艶をもつ。
- d 加工の効果…切断・研磨による効果大。
- e 構造性…完成された固有の造形をもつ。
- f 生態…固有の生態をもつ動物の一部分である。

六レベルにわたるこのような属性を、たとえば翡翠や真珠、琥珀、象牙など動物の歯牙の属性と比べてみよう。翡翠は硬くて多くは緑色をなし（aとc、dの属性に対応）、真珠はそのまま美しく完成されており（bとc、e）、琥珀は磨くと美しい黄色く朱色をなし（cとd）、動物の歯牙は硬く、一定の形状と色・艶をもち、研磨効果が高く、それ自体完成された造形美を備え、動物個体の一部である（a、b、c、d、e、f）（写真1）。以上の素材の属性は、歯牙を除くと二〜三レベルに亘るに留まっている。このようにみると貝殻は歯牙と同様、素材として豊富な属性を備えているといえる。これは後述するように、貝製品の多岐にわたる存在様式と対応してい

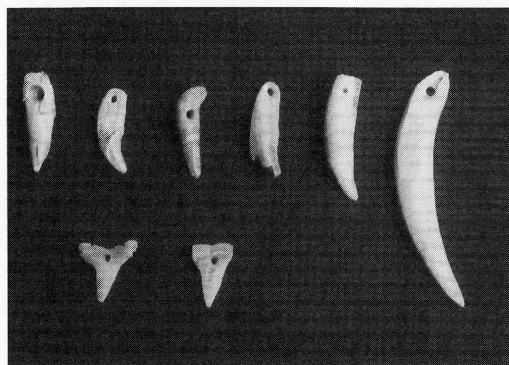


写真1. 動物の牙を用いた装身具（牙玉） 長崎県佐賀貝塚（縄文時代後期）。猪、オットセイ、鯨、キバノロ、バンドウイルカの歯牙を用いる。



写真2. 木の杓子、椰子の実の杓子、貝の杓子 沖縄県与那国町の民俗資料館展示。左向きにぶら下がっている杓子はオオベッコウガサの貝殻を用いたもの。1997年。

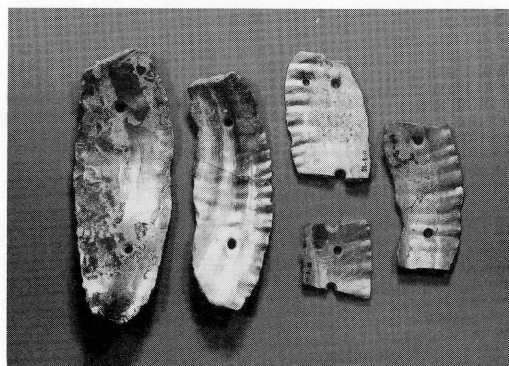


写真3. アワビの貝殻を用いた穂摘み具 神奈川県間口洞穴。弥生時代中期。

る。

なお以下に用いる貝類の名称は、和名の場合は片仮名で表記し、科レベルの場合はこれを平仮名で表記して区別することにした。例えば「ハマグリ」「ゴホウラ」は固有の和名、「いもがい」「しやこがい」は科の名まえである。

3 貝殻使用の文化レベル

日本における貝殻の使用例を集めてみると、これを単純に素材として評価し使用する場合と、そうではなく、貝殻から連想される何らかの観念によって使用する場合の、大きく二つの立場のあること

に気づく。以下素材の文化レベル別に述べよう。

(1) 素材としての貝殻

素材として貝殻には、以下の三つの使用状況がある。一つは便宜的使用品。手近にあるからという理由でのみ選ばれる場合である。大型の貝を供物用の容器に使用したり、即席の土掘り具にしたり、作業時の利器にしたりする類で、⁽¹⁾素材の選択には一定の判断が伴うものの、何を選ぶかは状況によって容易に変化しうる。二つめは、代替品である。杓子⁽²⁾（写真2）、穂摘み具⁽³⁾（写真3）、湯沸かし器⁽⁴⁾のように本来は木や竹製、金属製であるべき道具を、入手が困難な状況下、次善の策として貝殻で代用したものである。三つめは最適なものとしての使用である。素材と製品が一对一に対応し、その貝殻でなければならぬほどの価値を獲得している場合である。

三つめの好例に碁石がある。碁石の白石はチョウセンハマグリ *Meretrix lanancki* Deshayes の殻で作ったものを最上としているが、それはチョウセンハマグリ⁽⁵⁾の質感・美観が碁石に最適であると愛好家に高く評されたためである。しゃこがいや硬質ガラスも碁石の素材ではあるが、品質においてハマグリ碁石に及ばないという。

(2) 観念の表出手段としての貝殻

何らかの観念の表出手段として貝殻を選ぶ場合にも、観念と貝殻

の間にはイメージを仲介にした二種類の対応関係がある。一つは、社会に特定のイメージを伴う観念がすでにあって、これが貝の何らかの属性に対応している場合である。例えばスイジガイ *Harpago chinaga chinaga* を魔除けとする習俗、これは鉤形や棘は辟邪に効果的であるという観念とこれに対応するイメージが社会にすでにあったために、人々がスイジガイの棘状の突起に辟邪の効果を自動的に読みとってしまい、これを呪具にした結果といえる。⁽⁶⁾ またメガイアワビ *Haliotis sieboldii* Reeve 等が魔除けになったのは、魔物は視線を恐れるので目の多いものは辟邪に効果的、あるいは光る面は魔除けになるとする考えが一般であったゆえに、人々はその貝殻上に並んで開いた呼吸孔を目であると自然に読み替えてイメージを増幅させ、内側を外にむけた貝殻を辟邪の具にしたのである。⁽⁷⁾（写真4・5）。これらは貝によって辟邪観念のイメージを特定した例といえる。

もう一つは、貝殻によってこそ観念が具体イメージを得る場合である。例えば、日本で、安産のお守りの貝はたからがい（広義の小安貝）*Cypridae* と決まっている。⁽⁸⁾これはたからがいの形状が人々に出産を連想させたからである。民間では、妊婦が出産に臨んでハチジョウダカラ *Mauritia mauritiana* Rinnæus を握りしめると安産であるという。安産への願望はこのような習俗の有無に関わらず普遍的なものであるが、具体化した習俗は、たからがいのよ

表 1. 貝殻使用にかんする文化レベルの枠組み

文化レベル	素材の価値	対応する貝殻の属性	類例（近現代）
形而下レベル （機能の実現手段）	I. 便宜的素材	a・b・c・d	容器、作業用小道具など
	II. 代替素材	a・b・c・d	貝杓子、ホラガイ製ヤカンなど
	III. 最適素材	a・b・c・d	基石、貝ボタン ⁽⁹⁾ 、法螺、 貝製飯蛸壺 ⁽¹⁰⁾ 、貝鍾 ⁽¹¹⁾ など
形而上レベル （観念の表出手段）	IV. イメージに対応する素材	e	スイジガイの魔除け、メガイアワビの魔除けなど
	V. イメージを喚起する素材	e・f	タカラガイの安産御守りなど

うな造形物が存在しなければ生まれ得なかったはずである。これは民俗観念が貝殻によってこそ具体的なイメージを獲得し得た例といえよう。

以上の二つの立場において貝殻はともにある観念の表出手段であ

る。前者では、何らかのイメージをもつ観念の数ある表出手段のうちの一つが貝殻であるのに対し、後者では貝殻がイメージの漠然とした観念から具体的イメージを引きだすための手段となっている。

(3) 貝殻使用にかんする文化レベルの枠組み

述べてきたように、貝殻を使用する文化レベルには、「道具の素材」としてのレベルと「観念の表出手段」としてのレベルの二つがある。これをそれぞれ「形而下レベル」、「形而上レベル」と言い換えてみると、形而下レベルはさらに「便宜的素材」と「代替素材」、「最適素材」、形而上レベルは「イメージに対応する素材」と「イメージを与える素材」に分けることができる。これらを、先ののべた貝殻の文化的属性a～fに対応させて整理したのが、表1である。

表では、貝製品の文化レベル——「便宜的素材」から「観念にイメージを与える素材」までの五段階に、それぞれⅠ～Ⅴの数字を与えた。数字が増すほど貝の属性に対する限定度が強まり、文化的意味の増大していることを示すためである。

4 日本列島における古代貝文化の様相

日本列島の古代の貝製品には、ヤコウガイ *Turbo* (*Lunatica*) *marumora* Linnaeus の螺鈿工芸（写真6）、仏教（密教）における法螺、ハマグリ *Meretrix lusoria* Röding を用いた貝覆⁽¹²⁾、遡って

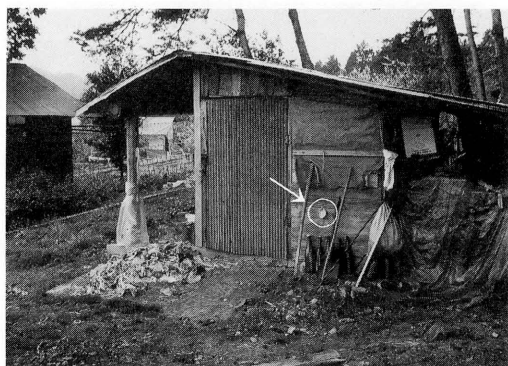


写真4. アワビの魔除け 鶏小屋にアワビの殻を吊るしてイタチなどの害を避ける。山口県玖珂郡向坪の山村にて。1994年。



写真5. アワビの魔除け 貝殻の内側を外に向けて牛馬舎の軒下に打ち付けられたアワビ。山口県阿武郡川上町野土呂の山村にて。1993年。

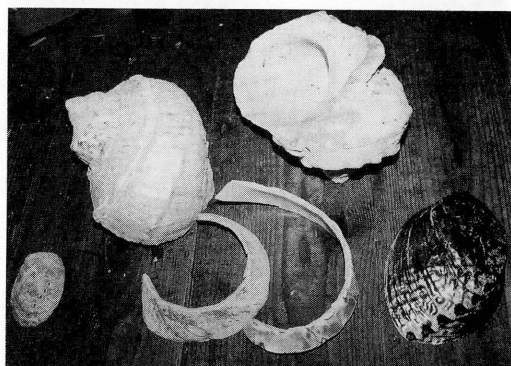


写真6. ヤコウガイ、アワビを用いた螺鈿 貝殻から細長い帯状の部分を切り取って加工する。琉球漆器の工房にて。1993年。

縄文、弥生、古墳の各時代にわたる貝製腕輪（貝輪）などがある。以下、日本列島の古代貝文化を代表する文物について、先に示した分類レベルごとに述べていこう。その際、列島内で最も貝文化のさかんな琉球列島と、九州以北の地域を比較しながら、それぞれの貝文化の特徴を抽出することを心がけたい。

(1) 形而下レベル——代用品としての貝製品

① 沿岸民の用いた南海産貝輪⁽¹³⁾

縄文時代晩期～弥生時代初頭、九州西海岸の五島列島、松浦半島、響灘沿岸、島根半島沿岸の人々の間に、縄文時代の文化伝統とは異

なるスタイルの貝製腕輪（貝輪）が流行する。縄文時代の貝輪は、近海の二枚貝を用いて作り、もっぱら大人の女性が着装する装身具であった。新しく登場した貝輪は、近海の二枚貝に加えてゴホウラ *Tricornis latissimus* *Linnaeus* もが、*Conidae* オオツタノハ *Patella* (*Penepatella*) *optima* *Pilsbry* という琉球列島産の大型巻貝を見事に磨いた円環形の美しい腕輪で、老若男女を問わずに使用するものであった（写真7・8・9）。これを最初に使用した人々は、朝鮮半島系の墓である支石墓や覆石墓に葬られていたので（長崎県北松浦郡松原、佐賀県呼子町大友、山口県豊浦町中ノ浜の各遺跡）腕輪習俗も本来朝鮮半島に由来するものと考えられる。ところが、同様

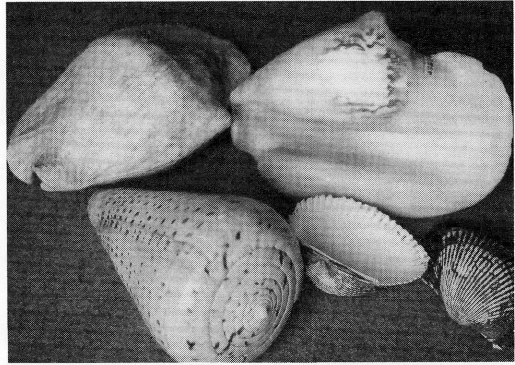


写真7. ゴホウラ、ダイミョウモガイ、アカガイ 上の二つがゴホウラ、手前左がダイミョウモガイ、手前右の二つがアカガイ。

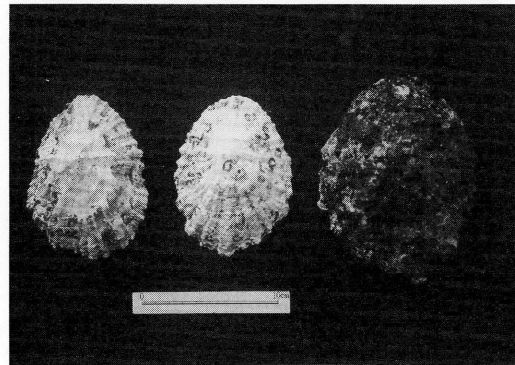


写真8. オオツタノハ 宝島で採取したもの。

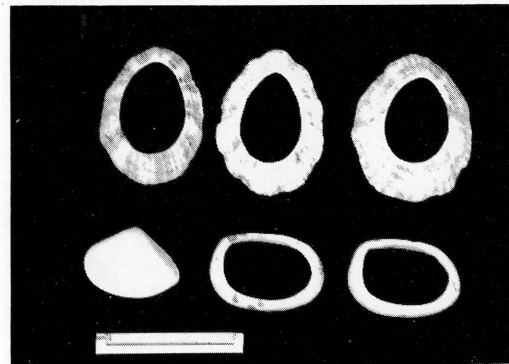


写真9. 弥生時代初期の沿岸民の貝輪 島根県古浦遺跡で出土したオオツタノハとハイガイの腕輪。

の貝輪は同時期の朝鮮半島支石墓社会に今のところ見つからない。彼の地に多くみられるのは青銅の円環形の腕輪である。またやや時期は下るが、弥生時代の九州に舶載された腕輪に、円環形のガラス製腕輪がある。弥生時代に新たに登場する腕輪の源流が支石墓社会に発するのであれば、沿岸民たちの用いたゴホウラ、いもがい、オオツタノハの貝輪は、半島・大陸人たちの青銅やガラス製の円い腕輪に対応するとみてよいだろう。

縄文時代晩期〜弥生時代初頭、西北九州沿岸から山陰の沿岸に登場した円い貝輪は、朝鮮半島の人々の用いていた青銅やガラス、あるいはその延長にある玉ぎよくで作った円環形の腕輪を、貝を用いて模造

した腕輪であったと、私は考えている。

② 広田遺跡の貝製品⁽¹⁴⁾

種子島南部の東海岸、太平洋に面する砂丘に弥生時代後期〜古墳時代の集団墓地、広田遺跡がある。埋葬された広田遺跡人たちは、おびただしい貝製装身具を伴っていた。それらは貝輪、長方形の札状製品（貝符）（写真10・11）、勾玉状の装身具（竜佩）（写真12）、玉類（ぞうげつのがい製玉 *Daenulimidae*、貝製白玉・小玉、ノシガイ製玉 *Fusistoma mendicaria* Linnaeus）、円盤状・方形盤状の貝製品などである。これらの素材貝類は、種子島周辺で入手可能なものと、より南のサンゴ礁地域から輸入したものとで成り立っている。広田遺



写真 10. 貝符 鹿児島県広田遺跡。弥生時代～古墳時代併行期。

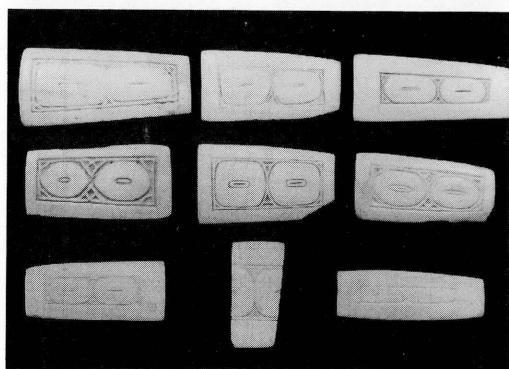


写真 11. 貝符 鹿児島県広田遺跡。古墳時代併行期。

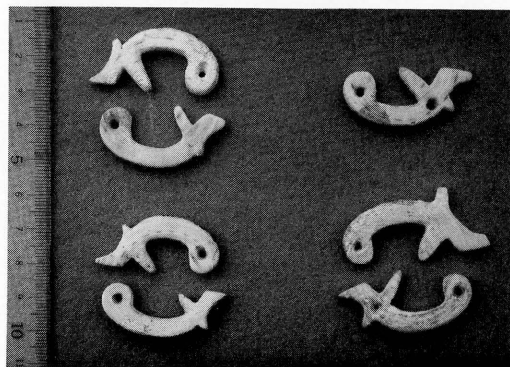


写真 12. 魚佩 鹿児島県広田遺跡。弥生時代後期～古墳時代併行期。

跡の貝製品は、種子島をふくむ琉球列島の他地域の貝製品に一部共通するものの、その多くは広田遺跡に特有である。貝製品の形状、貝符上に彫刻された図文や、彫刻の雰囲気は古代中国の文物に共通していることから、はやく金関丈夫・国分直一両氏によって、広田遺跡の貝製品は中国古代の玉製品ぎよくを模したものであるかと指摘されておき、今日まで大方の賛同を得ているようである。

広田遺跡の貝符、魚佩を観察する限り、彫刻された文様は明確なる範型をもつとみられるが、明らかに貝(いもがい)⁽¹⁵⁾で製作するに適しているとはいえず、本来の素材による製品が別にあったことを強く思わせる。貝符は、貝を代替素材に用いた何らかの模

造製品と判断されるのである。その本来の姿は、やはり玉による同様の製品であつたろう。広田遺跡が調査されてからすでに四〇年を経過するが、これら貝製品に対応するべき玉製品は、残念なことに中国において未発見である。

(2) 形而下レベル——最適素材としての貝製品

① いもがいを用いた馬具⁽¹⁶⁾

朝鮮半島新羅の五〜六世紀の王墓には、しばしば豪華な馬具が一式伴う。その中には雲珠・辻金具・飾り金具とよばれる革紐どうしを固定したり装飾する金具があり、これらはしばしば凝ったデザイ

ンをもつ。金具には緑色と紺色のガラスを巡らした伏せ鉢状の台座が組み合ったりするが、五世紀末から六世紀初頭、これらと并列にいもがいをういた台座が登場する(写真14)。暗い色調の馬と革帯に、輝く金色の金具と真つ白ないもがいは、遠目にも映えて人気があったらしく、これ以後、新羅ではさかんにいもがいをういた金銅製の雲珠・辻金具・飾り金具が使用される。この流行は間もなく九州や西日本に伝わり、古墳時代後期の馬具を特徴づけていく。馬具に使われたいもがいはやや大型のもので、サンゴ礁地域に産する種とみられる。新羅人はおそらく九州の豪族を介して、琉球列島産のいもがいを入手したのであろう。いもがいをういた雲珠・辻金具・

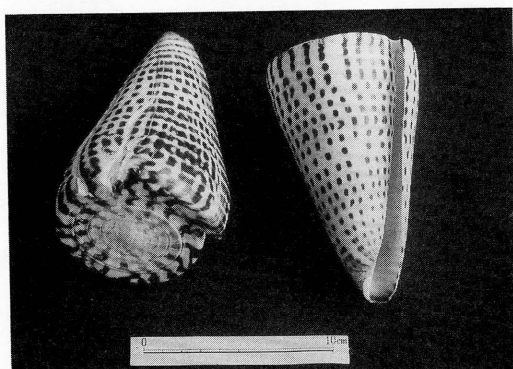


写真13. いもがい (アンボンクロザメ)

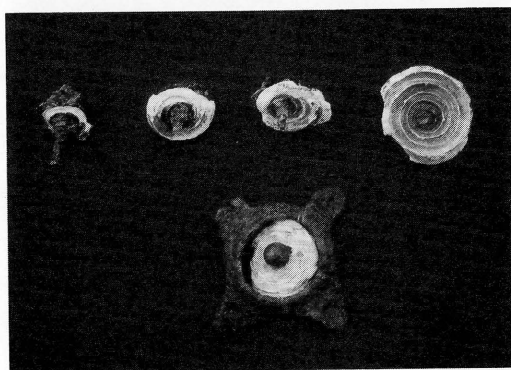


写真14. いもがいをういた馬具 上段は飾り金具、下段は辻金具。福岡県川島古墳。古墳時代後期。

飾り金具は、やがて関東の武人たちにも愛用され、流行は日本での後一〇〇年ほど続く。
いもがいをういた馬具は、貝殻がそれ本来の材質価値をもって評価された例といえる。

② 琉球列島のヤコウガイ容器⁽¹⁷⁾

琉球列島の遺跡では縄文時代以来古墳時代併行期に至るまで、うみぎくがい *Spondylidae* やしゃこがい *Tridacnidae* ヤコウガイ(写真15)、巻貝の殻軸部を用いた容器が頻繁に登場する。これらはおそらく琉球列島に一般的な食器であったとみられる。これらの中でも特徴的なのはヤコウガイ製のヒシヤク状容器である(写真16)。

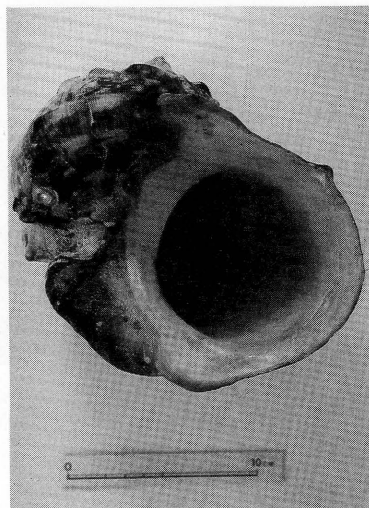


写真15. ヤコウガイ

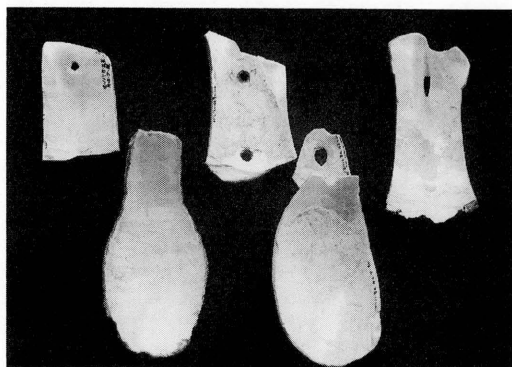


写真16. ヒシャク形ヤコウガイ製品 鹿兒島県マツノト遺跡出土。

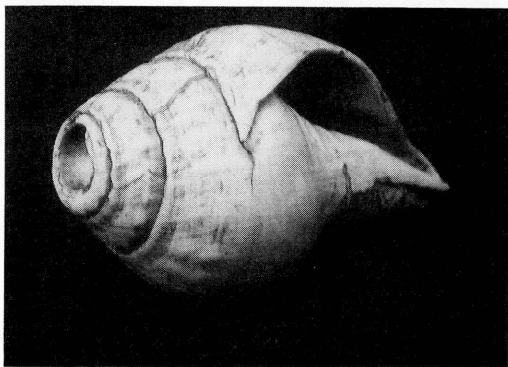


写真17. 東寺所蔵のシャンクガイ製法螺 空海が請来した「白螺貝一口」である可能性が高い。

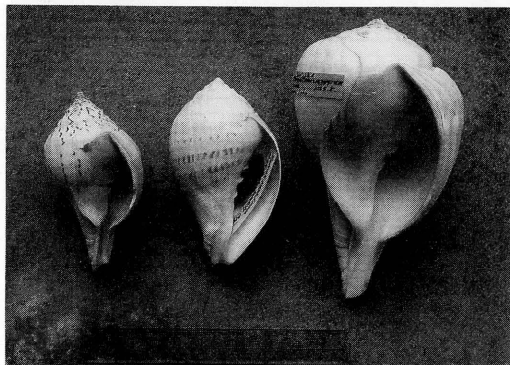


写真18. シャンクガイ インド東南岸およびスリランカに分布。沖縄貝類標本館所蔵。

ヤコウガイ製ヒシャク状容器は、ヤコウガイの体層を大きく割り取り、割りとった貝殻の殻口部近くにえぐりをいれて把手をつくり、貝殻表面・周縁を入念に研磨して作る匙形の容器である。把手にはしばしばV字状の割りこみや華麗な彫刻が施され、鮮やかに磨き出された緑色の貝殻外面、真珠光沢をもつ内面とともにこの器に豪華な雰囲気を与えている。彫刻をもつものは、おそらく何らかの儀礼にかかわる特別の容器であったのだろう。

この容器は先島を除く琉球列島に独自のもので、先史時代から古琉球期に至るまで（一六世紀）の四千年間、その様式を若干変化させながら作り続けられている。私はかつて『おもろさうし』にしば

しば見られる「金の御柄杓、真玉の御柄杓」等の記述から、グスク出土のヤコウガイ容器を琉球王朝の儀礼に用いられる柄杓の一つではないかと推測した。先史時代からの継続使用は、これを思わせるに充分である。

ヒシャク状容器は、ヤコウガイ以外の素材では作られることがなかった容器である。南島においておそらく儀礼用の匙であった容器は、独特の質感をもつヤコウガイをその唯一の素材としていたといえる。

③ ホラガイの法螺⁽¹⁸⁾

法螺は本来、「二切衆生の罪を消滅させ、覚悟させ」たり、「一切

諸天を招呼」するため等に吹く仏教上の役割をおびた楽器である。日本最初の法螺は、記録による限り大同元（八〇六）年空海が唐より請来した「白螺貝一口」である。この「白螺貝一口」は、現在まで厳重な管理のもとに伝えられてきた東寺（教王護国寺）「御請来遺物」の中のシャンクガイ製法螺である可能性が高い（写真17）。シャンクガイ *Tubinella pyrum* (Linnaeus)（写真18）は白色をした、スリランカに産する巻貝である。九世紀前半まで、シャンクガイは仏教における法螺のおそらく唯一の素材であった。ところが中国で皇帝がかわると、仏教弾圧等によって唐の仏教は急激に衰退していき、長安—インド間の往来も稀になってしまう。

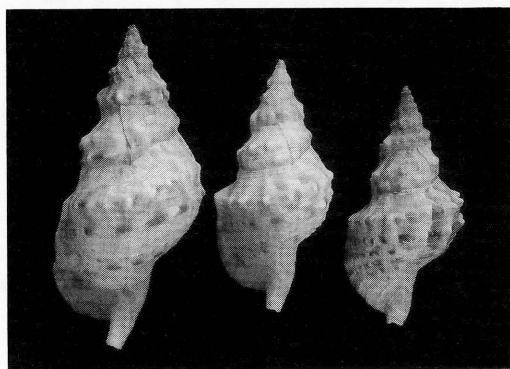


写真19. ボウシュウボラの類 左からトウカイボラ、ナンカイボラ、ボウシュウボラ。

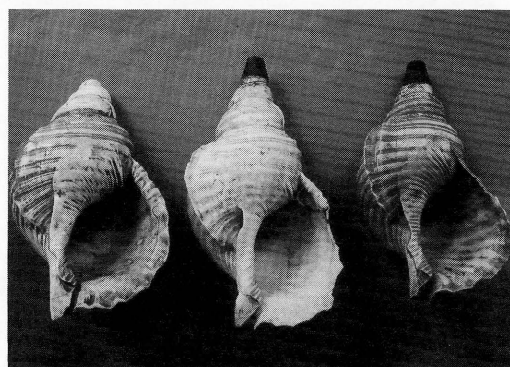


写真20. ホラガイの法螺 法隆寺保管の法螺。

中国の寺院は全ての法具を自前で調達する必要に迫られ、法螺についても中国近海の大巻貝でこれをまかなうようになったと推測される。空海の後、同じ長安の寺院に留学した恵運が日本に持ち帰った法螺は「五色螺子」である。字句からみるとこれは白いシャンクガイの法螺ではなく、中国南海産の大巻貝であったろう。日本でも九世紀末には遣唐使が廃され、唐との公的関係は疎遠になる。しかし国内では密教が順調に発展し、工芸技術の発展とともに法具の国内調達は進んだとみられる。法螺についてもおそらくは日本近海の大巻貝（ボウシュウボラ *Charonia sandie sandie* Reeve 類）がこれに充てられたであろう（写真19）。



写真21. ゴホウラと初期の南海産貝輪 右二つは福岡県金隈遺跡出土品。男性が右腕にはめていた。弥生時代前期。

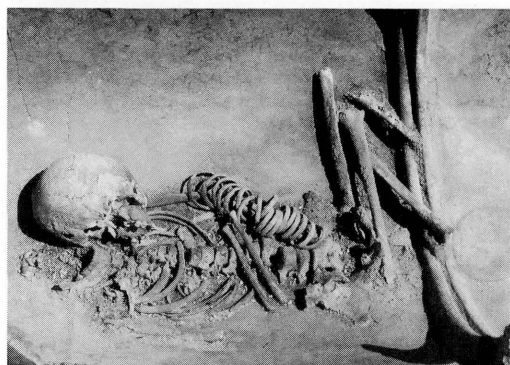


写真 22. いもがい貝輪をはめた女性 佐賀県花浦遺跡。女性が左腕に 18 個の腕輪をはめている。弥生時代中期。



写真 23. いもがい貝輪 鹿児島県松の尾遺跡出土品。弥生時代終末期。

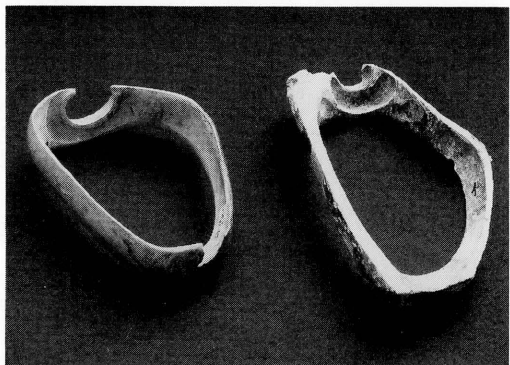


写真 24. 薄手に変化していくゴホウラ貝輪 左は福岡県諸岡遺跡出土、右は同じく立岩遺跡出土。弥生時代中期。

一〇世紀後半から一一世紀、東アジアの仏教は再び勢いを取り戻す。中国宋朝は仏教を保護する政策をとり、朝鮮半島では高麗が熱心な仏教国として登場する。この時期の記録によると、日本から法螺がこれらの国に献上品としてもたらされており、日本で調達された法螺が東アジアにおいて一定の需要を保っていたことを知る。この時期実際に取引されていた法螺は、国内のどの巻貝だったのだろう。当時の東中国海域を往来する商人たちの行動範囲が、すでに琉球列島を含んで北海道におよんでいることを考慮すれば、交易品に琉球列島産の大型のホラガイ *Chironia trilonis* (Linnaeus) が含まれていた可能性は高い。

一四世紀になって、法螺の実体はようやく明らかになる。法隆寺には一四世紀初頭の銘をもつボウシユウボラ類の法螺とホラガイ製の法螺が各一点、一五世紀後半の銘をもつホラガイ製法螺が一点ある。一四世紀末の記録に現われる東大寺の法螺二点は現在も東大寺に保管されており、それがボウシユウボラ類であることを知る。ボウシユウボラ類は日本近海産、ホラガイは琉球列島産である。このことから類推すれば、九世紀以降の古代の法螺にも、これらの巻貝が使用されていた可能性は高い(写真20)。

近世、近代にかけて、法螺の素材はもっぱらホラガイによって占められてくる。しかし近年、琉球列島産の大型ホラガイはすでに稀

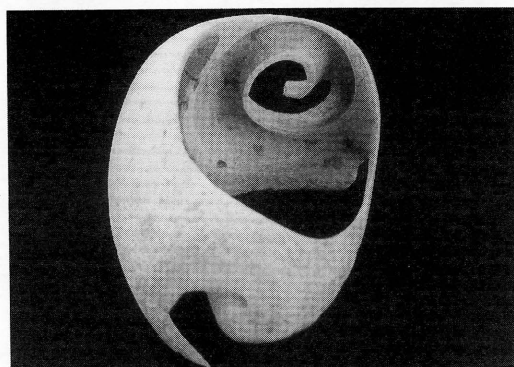


写真 25. ゴホウラ貝輪 山口県土井ヶ浜遺跡出土品。弥生時代前～中期。

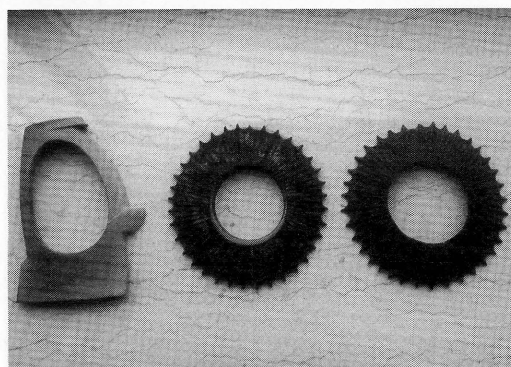


写真 26. 貝輪をもとにした儀礼の腕輪 左は碧玉製の鍬形石（滋賀県雪野山古墳出土）。右の二つは銅製品（京都府芝ヶ原古墳）。弥生時代終末～古墳時代前期。

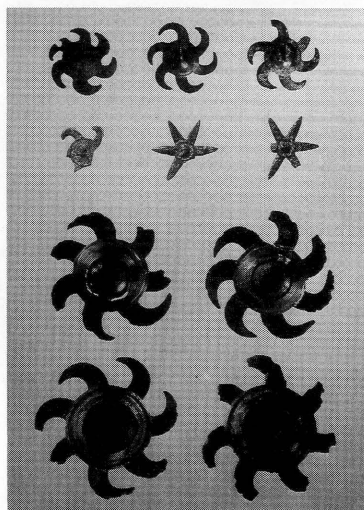


写真 27. 巴型銅器 上段；佐賀県桜馬場遺跡出土、中段；佐賀県東宮裾遺跡出土、下2段；香川県森弘遺跡出土。いずれも弥生時代後期。

で、現在はもっぱらフィリピン近海のものが修験道用に輸入されている。

日本における法螺の素材は、シャンクガイから中国渡来の「五色螺子」に、さらに本州・琉球列島産の巻貝（ボウシュウボラ類、ホラガイ）になり、近世以後はもっぱらホラガイになった。ホラガイは遙かな時間をかけて、法螺の唯一の素材になったのである。

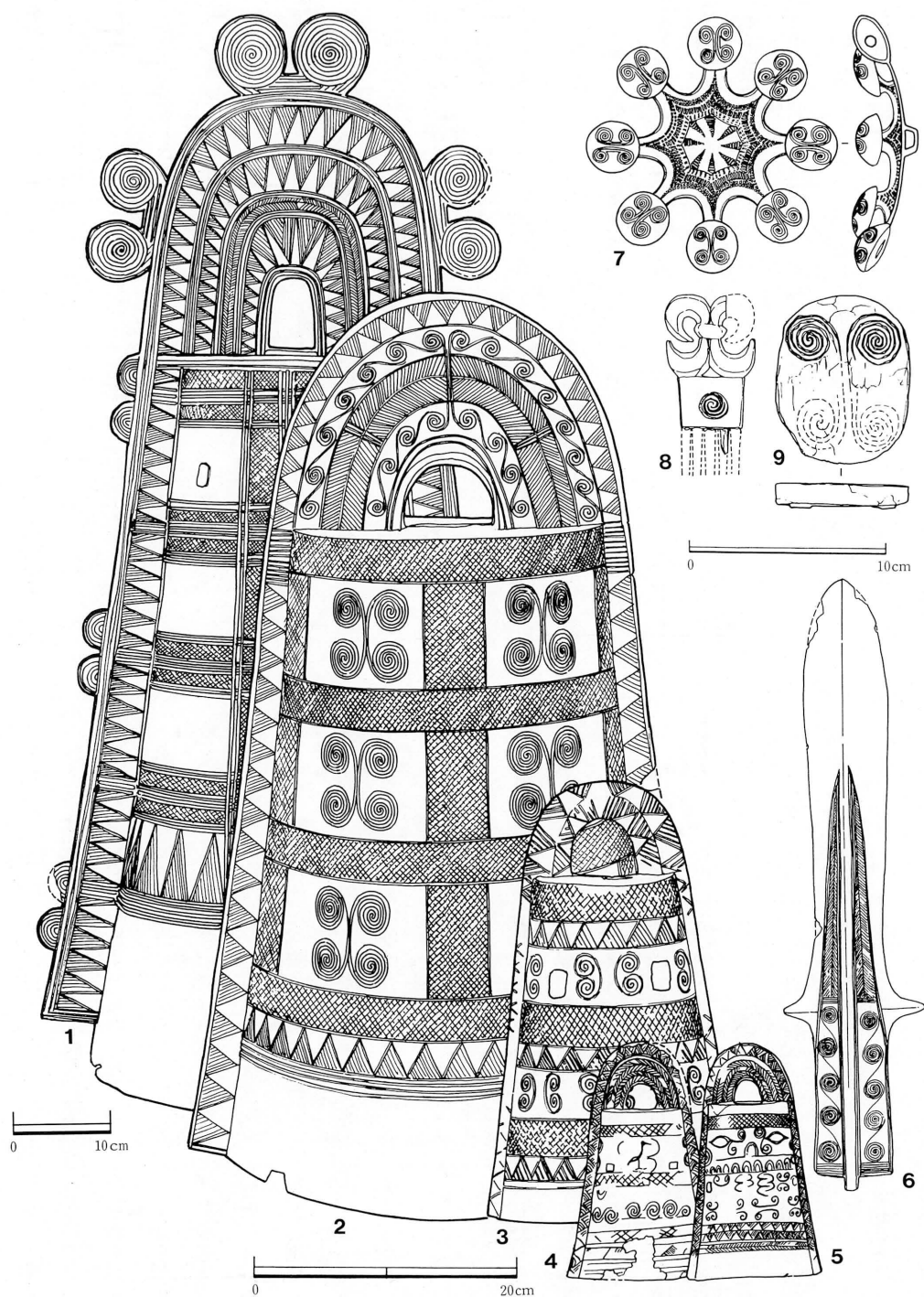
(3) 形而上レベル——イメージに対応する貝製品

① 農耕民の南海産貝輪⁽¹⁹⁾

弥生時代、響灘から北部九州の沿岸平野部を中心に、ゴホウラと

いもがいを用いた特色ある形状の腕輪（貝輪）が流行した。ゴホウラといもがいは、琉球列島のサンゴ礁域に生息する大型巻貝で、これらで作った腕輪をとくに南海産貝輪と呼んでいる。ゴホウラ貝輪は専ら男性の右腕にはめられ（写真21）、いもがいによる貝輪は女性に左または両腕にはめた（写真22・23）。南海産貝輪の形状は、一般の腕輪と著しく異なり、巻貝のうずまき構造をとりこんだ立体的な厚い造形であることを特徴としている（写真23）。これらの分厚い貝輪は、やがて一度に着装可能な数をふやすために次第に細身になり、うずまきを部分的に残しつつ全体形状を変化させていく。細身に変化していく過程でも、貝輪にはうずまきを最大限に残そうと

図1. 弥生時代のうずまき意匠



1 京都府比叺尼城の銅鐸（高さ107.0 cm） 2 兵庫県桜ヶ丘の銅鐸（高さ64.2 cm） 3 兵庫県神種の銅鐸（高さ35.5 cm） 4「伝伯耆」の銅鐸（高さ19.7 cm 春成1989図8引用） 5 広島県福田の銅鐸（高さ19.0 cm 同前図3引用） 6 岡山県瑜珈山の銅剣（長さ46.7 cm） 7 韓国伝洛東江流域の八珠銅鈴（春成1987図14の2引用） 8 滋賀県服部の木製櫛 9 大阪府巨摩鹿寺の四脚台形木製品（大阪府文化財センター1982第18図をもとに作成）

する配慮が認められる(写真24)。しかし南海産貝輪を最初に創造した福岡平野と響灘沿岸においては、依然として初期の形状が持続し、うずまきは強調されている。このことから私は南海産貝輪の本義は、巻貝のうずまき構造に深くかわっていたのではないかと考えるようになった(写真25)。

このような貝輪は、金属器や甕棺墓によって特徴づけられる農耕的な社会と、貝製品や石棺によって特徴づけられる響灘沿岸の半農半漁的な社会によって支持されてきた。いずれも朝鮮半島の文化的影响の強い地域での現象なので、南海産貝輪が登場する契機も、朝鮮半島の農耕社会に求めることができよう。私は、朝鮮半島南部の同時期の祭祀具の中にうずまき文様(連続渦文、双頭渦文など)が頻繁に登場し、また弥生人の作った祭祀具(銅鐸、銅剣、木製品)にも同様の文様が好んで採用されていることに注目している(図1)。これは弥生人が自らの祭祀に臨んで、外来のシンボル文様の中から、うずまき文様とこれに付随する祭祀的な意味を主体的に選択したからではないか。ではうずまきの意味するところは何か。私は、うずまき文様がとくに農耕社会で珍重された情況から、弥生人がこれを植物の生長に関わる生命力の記号として理解したのではないかと想像している。このように想定して南海産の貝類をみると、彼らが如何なる考えのもとにゴホウラといものがいを選び取ったかは理解しやすすい。この二つは見事なうずまきの他に、他貝にまさる厚さと大き

さを備えている。うずまきを内包する素材でつくった腕輪を司祭者が身につけることは、それが生命力を体現したものである以上、弥生人にとってすでに大きな意味をもっていたのである。

南海産貝輪は、外来の祭祀観念を弥生人がみずから解釈し、適材を琉球列島産の巻貝の中に見いだして作り上げた創造性あふれる産物である、と私は考えている。ゴホウラといものは、その明瞭なうずまき構造の故に、観念の表現手段として素材に選ばれたのである。なお、素材に貝が選択された副次的要因に、貝の玉質感と白色であることを尊ぶ中国的な価値観のあったことも考慮にいれてよいだろう。

②下賜された南海産貝輪⁽²⁰⁾

古墳時代初頭、南島交易の主たる利権を掌握したヤマト政権は、琉球列島からゴホウラやいもがい、オオツタノハなど弥生時代と同様の大型巻貝を入手し続け、これを腕輪に加工して儀式的具としていた。しかし間もなく腕輪加工の主流は、貝輪の形状を碧玉や銅で模倣した玉製腕輪類の製作に移り、南海産の貝類の需要は減少していく(写真26)。ただヤマト政権が、みずから初めて需要を開発した新登場の巻貝については、貝そのものの輸入が古墳時代中期まで継続する。

それはスイジガイやテングガイ *Chicoreus ramosus* (Linnaeus) で、貝殻に明瞭な突起や棘をもつ大型巻貝である。スイジガイ・テ

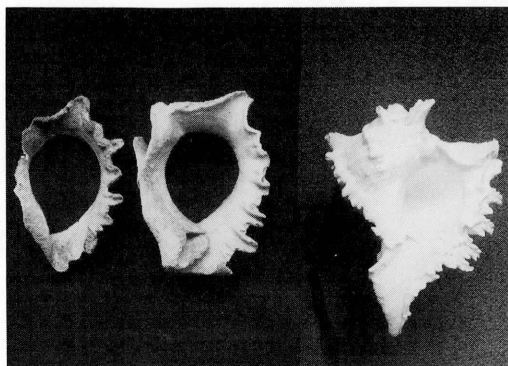


写真28. 棘をもつ腕輪 左二つの腕輪とその材料のテングガイ(右)。テングガイも南海産の貝である。古墳時代中期。

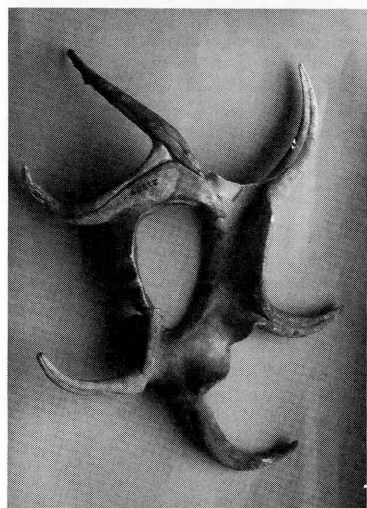


写真29. 鉤をもつ腕輪 静岡県松林山古墳出土品。古墳時代前期。

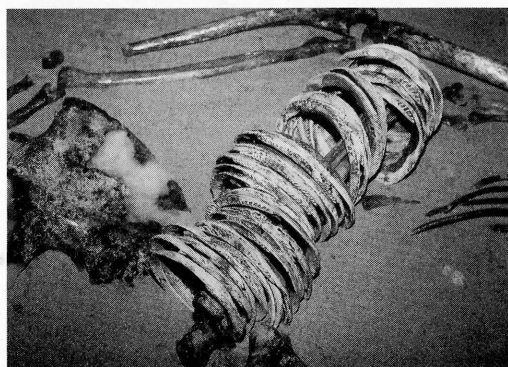


写真30. たまきがいを装着した女性 左前腕に29個を着装する。福岡県榎坂貝塚出土。縄文時代後期。

テングガイで作られた腕輪は、突起や棘などを磨きだし、本来の形状の奇抜さを強調するような造形で、腕輪作製の目的が那邊にあったかをよく示している。これらの貝輪は信濃、甲斐、遠江、出雲の畿内型の古墳に葬られた首長に贈られていた。すでに多くの地域が玉製腕輪類を尊び、一方で貝製腕輪の流行は終焉に向かう時期、何故これらの地域に突起・棘をもつ貝輪がヤマトから贈られたのか。

突起・棘への特別の意識は、弥生時代後期以降、各地で流行した有鉤銅釧や巴型銅器に端的に示されている(写真27)。巴型銅器は古墳時代にも継続する。その分布は信濃、遠江においてスイジガイ貝輪の分布と重なり、甲斐、武蔵、相模、伯耆においてスイジガイ

貝輪をもつ甲斐、テングガイ貝輪をもつ出雲に隣接している。つまりスイジガイ・テングガイで作られた腕輪は、伝統的に突起・棘への意識をもつ地域の首長に、選択的に届けられたとみることが可能である(写真28・29)。

このように解釈すれば、古墳時代前期～中期の突起・棘をもつ貝輪は、玉製腕輪類の流行とは無関係に、既存の觀念の表現手段として「鉤」に読み替えられた珍しい文物であったとみなすことができるだろう。

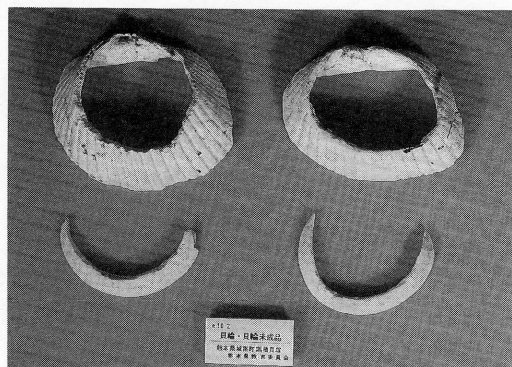


写真31. ふねがい貝輪とたまきがい貝輪 上段はふねがい貝輪、下段はたまきがい貝輪。熊本県阿高貝塚採集。縄文時代。

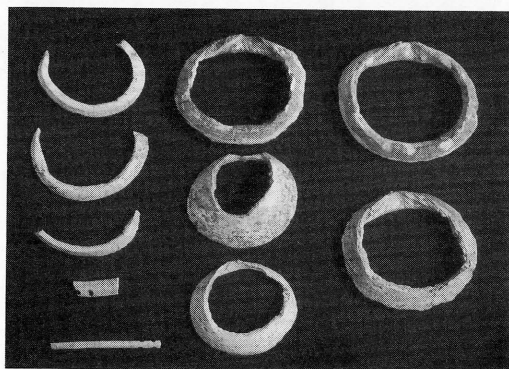


写真32. たまきがい貝輪 福岡県新延貝塚。縄文時代後期。

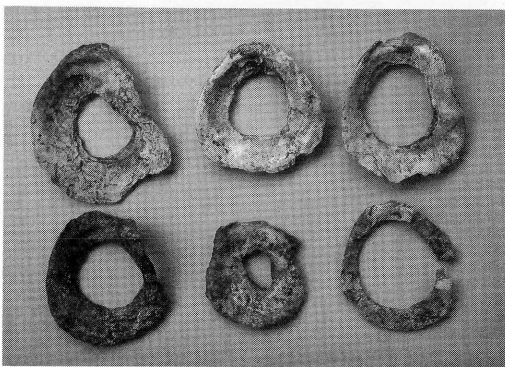


写真33. いたぼがき製貝輪 愛知県伊川津遺跡出土品。縄文時代後～晩期。

(4) 形而上レベル——イメージを与える貝製品

① 縄文時代の女性の貝輪⁽²¹⁾

貝輪は、縄文時代早期から登場する装身具であり、その素材にはふねがい *Arcidae* たまきがい *Glycymeridae* いたぼがき *Ostreidae* うみぎく *Spondylidae* アカニシ *Rapana venosa* (*Valencienne*) などが充てられてきた。これらの貝輪の着装例の九割は成人女性によって占められ、その着装数は片腕最大二九個に及ぶ。縄文時代の貝輪は基本的に女性の装身具といえる(写真30)。貝輪の素材は地域により内湾性の貝(いたぼがき、アカニシ)と外洋性の貝(ふねがい、たまきがい、うみぎく)が適宜使用されて

いる(写真31・32)。これらの内でも使用の多いのはふねがいとたまきがい、全体の六割を占める。ふねがい科にはアカガイ *Scapharca broughtonii* (Schrenck) ハイガイ *Tegillarca granosa* (Linnaeus) などが属しており、いずれもその血液にヘモグロビンを含んで赤い血をもつことを共通の特色とする。たまきがい科の貝も同様の生体的特徴を備えている。いっぽう、巻貝であるアカニシはその外唇部が鮮やかな朱色で、貝輪もこれを明確に意識した作りである。以上から、縄文時代の貝輪は、女性―血―赤という連想のもとに作製された装身具ではなかったか、という推定が成り立つ⁽²²⁾。このように考えると、これらの他に貝殻表面の色が鮮やかな朱、橙、

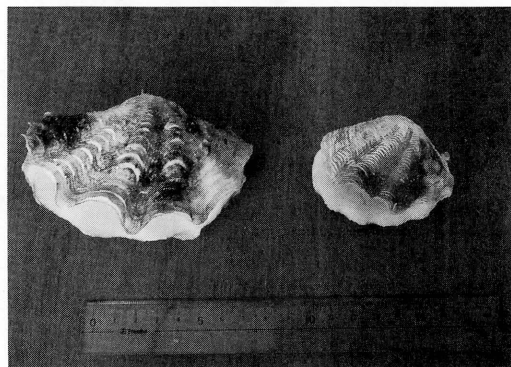


写真34. しゃこがい 左：シラナミ、右：ヒメジャコ



写真35. しゃこがいに頭をはさまれて埋葬される人物
沖縄県真志喜安座間原第一遺跡。縄文時代晩期～弥生時代
前期併行期。

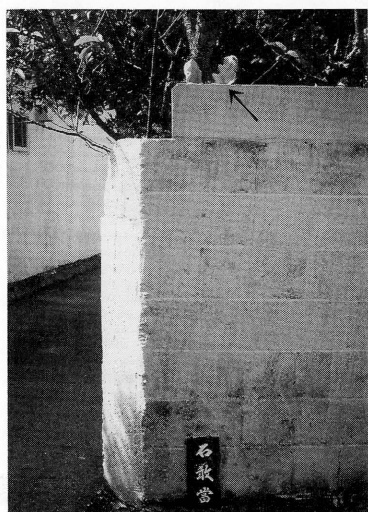


写真36. 三叉路の魔除けをするしゃこがい
沖縄県伊計島。1993年。

紅のうみぎくがわずかではあるが貝輪の素材になっていることも、理解しやすいのである。

このほかの素材として、貝輪全体の二割近くを占めるいたぼがきがある（写真33）。これについては、上の連想にかかわる特徴を貝自体に見いだし難い。ただいたぼがきは、胎生という他の貝に比べる際だった生態的特徴をもっている。六～九月の産卵期においていたぼがきの幼生は貝の外套膜内の一定の場所で育つので、この時期殻をわると外套膜内に黒っぽい小さな幼生の集まっているのがわかる。これを出産や多産という文化的意味に連想させれば、この貝殻をことさら女性の腕輪の素材に選んだ理由にはなるう。

つまるところ縄文時代の貝輪は、女性—血—赤—出産という連想のもとに作られた装身具であったのではないか。おそらく縄文文化においても、女性が成人し結婚して子供を産み育てることにかかわる共通する認識があり、特定の貝の生態がこれを連想させたために、その属性をとくに取り入れた装身具が生まれたのであろう。血、赤色、出産あるいは多産を表わすことのできる貝は、縄文人の女性性に赤色と多産のイメージを喚起したと考えたい。

②しゃこがいの辟邪⁽²³⁾

沖縄諸島では新石器時代、墓地にしゃこがい（シラナミ *Tridacna* [Vulgodacna] *maxima* [Röding]、ヒメジャコ *Tridacna* [Flodacna]

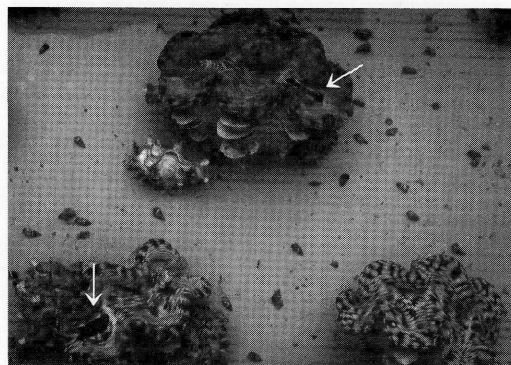


写真 37. ヒレジャコ 水槽内で外套膜を広げている。外套膜内に1孔が開いている。沖縄県水産試験場八重山支場にて。1997年。

squamosa Lamarck' シ
ヤコウ *Hippopus*
hippopus [Linnaeus]'
ヒメジャコ *Tridacna*
[*Chamaethracia*] *crocea*
Lamarck など) (写真
34) を置いたり、墓壇
内の被葬者の頭、関節、
手、足上にしゃこがい
を置いたり、甚だしき
は大型のしゃこがい
で

墓壇内の頭部を覆った

りする習俗が認められる(写真35)。この習俗は琉球王朝期に構造的な墓室が作られるようになってからも基本的に継承され、しばしば墓内の玄門近くや墓内部のしきり近くにしゃこがい置かれ、また子供にも意図的にしゃこがい置かれた。近世琉球期にはこうした使用法とは別に、何かを呪的に阻止する目的で、道の途中にしゃこがいを生息時のように対のまま地中に埋めるようになる。この習俗は現代まで継続し、幽霊の立つとされる家の通路にしゃこがい埋め、さらに近年では門柱上にしゃこがい対のまま載せる習俗が加わっている(写真36)。

しゃこがいの方言名アジケーは、ものがアジマーになる、つまり十字形に交叉している状態を示す意味を含んでおり、十字形の交叉は遮断、妨害による辟邪を意味した。アジケーとはアジマーの貝(ケー)という意味なのである。アジマーの辟邪思想は、文献によると古琉球期には存在している(一五〜一六世紀)。民俗学者は、しゃこがいの口が波形に交叉している状況がこの貝をアジマーの貝とよばせた要因であると指摘する。しかしこれはアジマーの辟邪思想があつてこそ可能なしゃこがいへの形の「読み替え」であろう。考古資料においてしゃこがいが一貫して墓に伴ってきたことは、そのような読み替え以前に、しゃこがいと人間の死がより直接的に結びついていたことを示している。

私は、しゃこがい墓の呪具になったのは、しゃこがい自身の生息に直接の要因があつたからだと考えている。しゃこがいはサンゴ礁の海底に上向きに開口し、普段は海中に華やかな外套膜をひらひらと出し、その中に呼吸のための一孔を開いて、それがあたたかも辺りを窺っている「眼」のように見える。⁽²⁴⁾ そうして物影が近づくと速やかに閉口し、しかも一旦閉められた口は容易に開くことがない(写真37)。しゃこがいのこのような厳重な遮断性と、敏感な危険察知力、海底に口を開いて奥にいかにも異界を感じさせるような特徴的な全体の造形は、日頃から海に親しんでいた古代琉球人に強烈な印象を与え、彼らの想像力を刺激したに違いない。琉球人はしゃこ

表 2. 本土地域の古代貝文化

文化レベル	素材の価値	素材	貝製品	素材入手地
形而下レベル (機能の実現手段)	I. 便宜的素材	巻貝、二枚貝	容器、ヘラ状製品、玉類、 刃器、装飾品（縄文時代～ 古代）	近隣
	II. 代替素材	ゴホウラ、いもがい、 オオツタノハ	まる型貝輪（弥生時代） （青銅・ガラス・玉製腕輪の 模倣か）	遠隔地
	III. 最適素材	いもがい ジャンクガイ ヤコウガイ ハマグリ	雲珠等（古墳時代） 法螺（古代） 螺鈿（古代） 貝覆い（古代）	遠隔地 遠隔地 遠隔地 近隣～遠隔地
形而上レベル (観念の表出手段)	IV. イメージに 対応する素材	ゴホウラ、いもがい、 スイジガイ、テング ガイ	うずまき型貝輪（弥生時代） 突起・棘をもつ貝釦（古墳 時代）	遠隔地 遠隔地
	V. イメージを 喚起する素材	ふねがい、たまきが い、アカニシ、いた ぼがき	女性の貝輪（縄文時代）	近隣

表 3. 琉球列島の古代貝文化

文化レベル	素材の価値	素材	貝製品	素材入手地
形而下レベル (機能の実現手段)	I. 便宜的素材	巻貝、二枚貝	容器、玉類、刃器、装飾品、 工具（先史時代～グスク時 代）	近隣
	II. 代替素材	いもがい うみぎくがい等	貝符、竜佩等（種子島の弥 生～古墳時代） （玉製品の模倣か） 鯨歯形製品（先史時代）	近隣・遠隔地 近隣
	III. 最適素材	ヤコウガイ しゃこがい スイジガイ、イトマ キボラ	容器（先史時代～古琉球） 斧（先史時代） 漁労具（先史時代）	近隣 近隣 近隣
形而上レベル (観念の表出手段)	IV. イメージに 対応する素材	（オオベッコウガサ、 うみぎく、サラサバ テイ、ゴホウラ）	（貝輪、先史時代）	（近隣）
	V. イメージを 喚起する素材	しゃこがい	呪具（先史時代～現代）	近隣

がいのこのような生態に何より開閉性、遮断性をよみとり、これを重大な境界の機能として認識するに至ったのではないだろうか。こうした認識が、しゃこがいを紹介した「生」と「死」の解釈を生み、あの世からの遮断を望むこの世の習俗にしゃこがいを登場させることになったのだと考えたい。斜めにほりこまれた墓壙の中に、頭の方を低くしてしかも頭部の両側をしゃこがいで挟み込まれてうつぶせに葬られていた被葬者の存在は（真志喜安座間原第一遺跡の例。写真³⁵）、後のアジマーの思想ではなく、しゃこがい本来の閉口力によらねば、その強烈な呪的意味を理解することができないと思う。しゃこがいは、出ていこうとする死霊を捕獲・封入するための呪具、人をあの世に留めおく呪具、すなわち死にたいする辟邪の具として琉球人に認識されてきたのではないだろうか。このようにみてこそ、しゃこがいと墓との強い結びつきを理解することができ、しゃこがいが死の辟邪に明確なイメージを与えた素材であったと解釈することができ。

しゃこがいはその後アジマーの辟邪思想の影響によって、その波形の口が十字形に読み替えられ、もとより辟邪の貝であったことから名称もアジケーになる。こうしてしゃこがいは「出ていこうとするもの」だけでなく「侵入しようとするもの」をも阻止する辟邪の具になる。最近門柱上に対でのっているしゃこがいや、T字路突き当たりの塀ののっているしゃこがいは、魔除けの獅子や石敢当と同

様「侵入してくるものを跳ね返す辟邪の具」にさえなつて、その守備範囲をとめどなく広げている。これは威嚇する獅子の口がしゃこがいの口に読み替えられたためにおこった現象である。このようにみると、しゃこがいはアジマーの辟邪観念を特定させた素材でもあり、また威嚇の辟邪観念を特定させた素材でもあるといえる。

5 貝文化試論

のべてきた貝製品の種類は、日本列島の貝文化を語るに充分ではなく、また提示したいいくつかの解釈に異論もあるだろうが、列島貝文化の全体像を描くことを優先させ、先に進むことにしたい。先に示した文化レベルの枠組みに、前章の諸例に若干の補足例を加えた古代の類例を充填してみよう。前ページに本土地域と琉球列島とをわけて示した（表2・表3）。

両地域の貝文化を比べると、本土地域のものが遠隔地の貝を多く使用しているのに対し、琉球列島ではほとんどがその近海の貝でまかなわれていることに気づく。また前者では時代による貝文化の傾向が明らかなのに対し、後者ではそれほど顕著ではない。問題を整理するために、以下両地域の貝文化の流れを時代をおってみてみよう。

本土地域の貝文化は、縄文時代には、近海の二枚貝を用いた極めて独自性の高い腕輪習俗を生み、これが本土のほとんどの地域で受

容され、長く継続して、縄文文化の大きな特色となった(表2のレベルV、以下表2は省略)。弥生時代には大陸渡来の文化の影響下、このような装身観念は急速に衰退し、農耕社会の観念に適合する装身具が新たに選択されていく。琉球列島産の大型巻貝類(ゴホウラ、いもがい、オオッタノハ)はこの過程で九州に登場し、弥生時代の初期には、大陸的な正円形腕輪を模倣する素材として漁労民の一部に用いられていた(レベルII)。間もなく弥生社会独自の祭祀が成立すると、これに適合する貝素材が改めて選択され、うずまきデザインを意識した、いわゆる南海産貝輪が成立する(レベルIV)。

この時期、特定観念の表出手段(農耕祭祀)の素材獲得のために、適材(南海産貝類)の入手路を遠方(琉球列島)に開拓して取り寄せるという行為が日常化する。これは縄文時代にはなかった現象である。素材を遠方に求める傾向は、続く古墳時代、古代においても認められ、イメージの表出手段として、また工芸素材として南海産の貝がしばしば使われる。こうした傾向の中で、輸入法具であったインド産シャンクガイの法螺は、その代替素材を国産のボウシユウボラ類、ホラガイに求めながら(レベルII)、適材を琉球列島産ホラガイに絞り込んでいく(レベルIII)。

このように、本土地域における貝文化は、農耕社会成立を機に古代に至るまで、近海の貝から南島の貝へと需要の重心を大きく移動させてきた。貝文化のレベルはI~Vに及び、南海産の貝類もレベ

ルIII・IVを充足するなど、文化的にも重要な位置を占めている。しかし琉球列島の貝を大量に長時間にわたって採用してきたにもかかわらず、本土地域の人々はいかにこれらをもとに独自の観念を創出する(レベルV)に至らず、これをイメージの表出手段や形而下の素材として用いる(レベルII~IV)に留まった。

いっぽう琉球列島では先史時代以来、形而上・下両レベルにおいて近海のサンゴ礁の貝がふんだんに使用され、その一部は琉球王朝期、さらには現代にまで継続している。縄文時代併行期から現代に至る呪具としてのしゃこがい(表3のレベルV、以下表3は省略)の息の長さは、この地域の貝文化最大の特徴である。弥生時代から古墳時代併行期にかけて、一時期貝符や竜佩が登場するのは、異文化接触によっておこった貝による玉製品の代替現象とみられる(レベルII)。琉球列島に多い貝輪は、おそらく何らかの装身観念に結びついていたと考えられるが、知られる着装例が稀少なため、具体的研究は進んでいない。主眼的意味をもっていたとすれば、おそらくIVないしVレベルにおさまるであろう。

総じて琉球列島の貝文化は、発想・素材ともに在地のものに拠っている。本土地域のように素材を外に求め、次々に新たな文化現象の表現手段とすることはほとんどなく、在地的貝文化の各レベル(I~V)が長く継続する。この傾向は、琉球列島に階級社会が成立するグスク時代においても基本的に変わらない。

本土地域と琉球列島の貝文化は、先史時代以来対照的に展開している。本土地域は、極めて目的に多くの琉球列島の貝類を素材に取り入れて自らの貝文化となし、これを農耕社会や古代国家の形成に投影させてきた。しかし本土地域において最も主体性の強い貝文化は、在地の二枚貝を用いた縄文時代の貝輪に極まり、以後貝文化のレベルは徐々に形而下レベルに向かって移行してしまふ。これに対し、琉球列島は別個の歩みを保ち、むしろ素材の貝を外に提供することで、階級社会（グスク時代以降、一二世紀以降）への変化を実現してきたといえる。しかも形而下から形而上レベルまでの貝文化の体系が基本的に現代まで継続している点は、この地域の貝文化最大の特徴といえよう。

以上、貝製品の素材的価値を複数の文化レベルにおいて構造的に示し、文化史的な有効性を描こうとした。今回の作業は日本列島全域を包括したものではないが、試みに比較した二地域の全体像と方向は、しかるべき結論を導いていると思う。この方法の有効性について、今後も検討していきたい。

注

- (1) 矢野憲一『ものと人間の文化史62 鮑（あわび）』法政大学出版局、一九八九年、一八四～一九五ページ。
- (2) 宮本馨太郎『民具入門』慶友社、一九七三年、五二ページ。
- (3) 小田富士雄『貝包丁と鉄包丁』『考古学論叢』1、一九七三年。
- (4) 上江洲均『沖縄の暮らしと民具』慶友社、一九七二年、九ページ。
- 上江洲均『沖縄の民具』慶友社、一九七三年、五五ページ。
- (5) 宮崎県の基石製造業者から教えていただいた。以下の文献にも詳しい記述がある。白井祥平『ものと人間の文化史83-III 貝III』法政大学出版局、一九九七年、七八四～七八七ページ。
- (6) これについては下記の文献が詳しい。野本寛一『軒端の民俗学』白水社、一九八九年、三六～五六ページ。
- (7) 注(1) 文献二八三～二八七ページ、注(3) 文献五二～五四ページ、など。
- (8) J・G・アンダーソン『子安貝の表象』『黄土地帯』（松崎寿和訳）座右寶刊行会、一九四二年。柳田国男『宝貝のこと』『海上の道』一九六一年、筑摩書房。
- 亀山慶一「こやすがい 子安貝」『日本民俗事典』大塚民俗学会、一九四七年、二六八ページ。
- (9) 白井祥平『原色沖縄海中生物生態図鑑』新星図書、一九九七年、二六三ページ、など。
- (10) 平川敬治『日本における貝製飯館壺延縄漁』『民族学研究』55-1、一九九〇年、八六～九七ページ、など。
- (11) 注(4) 上江洲一九七二年文献、二〇五～二〇七ページ。
- (12) 注(5) 文献七八〇～七八四ページ。

(13) 木下尚子「南海産貝輪の系譜」『南島貝文化の研究』法政大学出版局、一九九六年、一三〇～四四ページ。

木下「南海産貝輪習俗の構造」同右、七九～一〇一ページ。

(14) 国分直一・盛園尚孝「種子島南種子町広田の埋葬遺跡調査概報」『考古学雑誌』43・3、一九五八年、一五三～一八三ページ。

木下「鹿児島県広田遺跡」『探訪弥生の遺跡 西日本編』有斐閣、一九八七年、二二六～二四五ページ。

木下「貝符」『弥生文化の研究』8、雄山閣、一九八七年、一九八～二〇七ページ。

(15) 貝符はいもがいの体層を用いて作り、竜佩はいもがいの螺塔部を使用する。いずれも大型のいもがいを使用している。いもがいは沖縄貝類標本館の中嶺俊子館長によれば世界に約八〇〇種類知られており、そのうち日本には約二〇〇種類が生息し、その大半は琉球列島に集まっているという。貝符や竜佩の素材になるいもがいは、アンボンクロザメやダイミョウイモ、クロフモドキ、オトメイモなどである。

(16) 木下「イモガイをつけた馬具——騎馬文化の中の南海産貝」『第11回古代史シンポジウム 倭国の形成と東アジアの騎馬文化』、一九九四年、三一～三七ページ。前掲『南島貝文化の研究』に再録、三五～三五八ページ。

(17) 木下「貝製容器小考」前掲『南島貝文化の研究』、五一～五三〇ページ。

(18) 木下「白螺貝一口」考」『文学部論叢』第五〇号史学編、熊本大学史学会、一九九六年。

木下「南島交易ノートー古代・中世における法螺とホラガイの需

要」『東アジアにおける社会・文化構造の異化課程に関する研究』、平成六～七（一九九四～九五）年度科学研究費補助金一般研究（B）研究成果報告書、研究代表者足立啓二、一九九六年、五七～八八ページ。

(19) 木下「南海産貝輪の生成と展開」前掲『南島貝文化の研究』、四九～七六ページ。他は注（13）文献に同じ。

(20) 木下「古墳時代南島交易考——南海産貝釧と貝の道を中心に」『考古学雑誌』81・1、一九九六年、一～八一ページ。

(21) 木下「古文化研究会発表要旨——縄文時代の貝輪」『古文化談叢』34、一九九五年、二七六～二七七ページ。

(22) このことは渡辺誠氏が早く指摘している。渡辺一九七四年、「縄文人の博物誌——赤貝の腕輪」『えとのす』第1号 新日本教育図書。

(23) 木下「辟邪の貝——しゃこがい考」『比較民俗研究』6、一九九二年、五～三九ページ。

(24) 正確には入水管と出水口で、これらは交互にゆるやかな開閉を繰り返しているので、常に一つの眼が開いているように見えるのである。しかし実のところ、「眼」の役割を果たしているのはこれとは別の器官とされる。それは外套膜にある「光受容器」で、これが「人間やその他のものの影を感じて外套膜を退縮させ」るからである。こうしてしゃこがいは「熱帯の海に多い肉食者の攻撃からの防禦手段」を得ている。

奥谷喬司『海の貝50種』ニューサイエンス社、一九八〇年、九二～九三ページ。